

福井の幕末明治 歴史秘話

<第34号>

平成30年4月26日発行

敦賀の発展に一途な思いで取り組んだ実業家、大和田荘七！

日本海の重要な港であり、北陸道の要路でもあった敦賀。今回は、その近代化の基盤を築いた大和田荘七（おおわだしょうしち）を取り上げます。



大和田荘七

大和田荘七は、安政4（1857）年、敦賀市相生町の薬屋、山本九郎左衛門の次男として生まれました。子どもの頃から賢く、それが北前船の船荷問屋、初代大和田荘七の目にとまり、22歳で大和田家の養子となります。明治20（1887）年、31歳で襲名すると、近代化が進む時代の波をいち早く察知し、手腕を発揮。日本海沿岸一の大実業家へと成長していきました。

明治17（1884）年、敦賀・長浜間の鉄道が開通。荘七は、敦賀の商人に対する便宜と利益のため、明治25（1892）年に大和田銀行を設立します（当時36歳）。荘七は、設立の前年、総理大臣兼大蔵大臣であった松方正義と懇談し、敦賀に米穀取引所と銀行を設立する必要性を力説。その際、荘七自身による銀行設立を薦められたのが契機とされています。荘七は、設立にあたり“在来の銀行を士族銀行とすれば、大和田銀行は呉服屋形式で親切丁寧、客に敬意を表す”と語っており、そのとおりに“丁稚銀行”のあだ名で繁盛しました。その後、第二次世界大戦中に国の政策により三和銀行と合併するまで発展します。

鉄道の開通を機に活況を見た敦賀。しかし、荘七は、陸上輸送の発展による港の存在意義の低下を懸念します。荘七は、海外に活路を求め、敦賀港が国際的な貿易港として指定されるよう働きかけを開始しました。日清戦争の最中に調査員をウラジオストクに派遣。収集した情報を関係者に提供し、指定に備えるよう指導したと言います。明治32（1899）年、ついに努力が実り、敦賀港は国際貿易港の指定を受けます。しかし、その直後、鉄道の富山延伸により国内航路が不振に陥ります。さらに外国貿易も伸び悩み、国の指定解除の危機に直面。荘七は、自ら貿易会社を設立して牛や大豆を輸入するなど指定維持に尽力しました。

明治45（1912）年、新橋と金ヶ崎（敦賀）間に欧亜国際連絡列車が運行。敦賀は、ウラジオストクからシベリア鉄道を通じてパリまで直結する玄関口となり、荘七の努力は敦賀の発展に結実していきました。

荘七が壮年のころ友人に宛てた手紙には、“幸運者は真の不運者を助くべく、社会に貢献するのが人の道”と記載されています。その想いは、郷土を中心に一生を通して貫かれました。まさに、愛郷に誠を尽くした「敦賀近代化の父」だったのです。

<参考資料> 敦賀市立博物館研究紀要第25号（二代大和田荘七略伝）、若越山脈（第二集）

～幕末ふくい歴史紀行～ [重要文化財 旧大和田銀行本店本館]

・現在、敦賀市立博物館として利用されている旧大和田銀行の本店建物。地上3階、地下1階の洋風建築で、屋内には大理石も用いられています。当時、北陸では珍しかったエレベーターが設置されていたほか、3階の集会場等は、市民に開放されていました。

【住所】福井県敦賀市相生町7-8(アクセスは下記参照)



旧大和田銀行本店本館

★お知らせ テーマ展「近代敦賀港と大和田荘七」を開催！

・敦賀市立博物館で開催(平成30年4月26日(木)～11月30日(金))

・大和田荘七が創設した旧大和田銀行本店建物(現在の敦賀市立博物館)で、近年寄贈された荘七の肖像画を展示するほか、荘七の事跡を紹介します。

【住所】福井県敦賀市相生町7-8(コミュニティバス 松原線・金山線・常宮線・山公文名線「神楽町」下車 徒歩約5分)

(発行者)福井県

(問合せ先)福井県観光営業部ブランド営業課 山田、前田 ☎ 0776-20-0762